復活！大宮神社のちゃらぼこ太鼓

♪ チャンチャン チャラボコ チャラボコ スッチャン チャラボコ チャンデコ チャラボコ チャン ♪

蒲郡のお祭りと言えば、ちゃらぼこ太鼓の音色を連想する方が多いのではないでしょうか。船の形をした山車を引き、その上で子どもたちが独特の甲高く澄んだ音色のちゃらぼこ太鼓と大太鼓を叩き、周りでは軽快な笛の音色が奏でられます。幼少期を蒲郡で過ごした人にしてみれば、あの音こそが祭りの象徴と感じるかもしれません。しかし、ちゃらぼこは伊勢の方から海岸沿いを伝わり、東は蒲郡でストップ。意外なことに、豊橋でちゃらぼこ太鼓を知っている人は少ないようです。

落合川の東の中程に位置する『大宮神社』の奉納祭では、かつて大人たちがちゃらぼこ大鼓の撥（ばち）を手にしていました。いつの頃からかその役が子どもに回り、その後20年近く大鼓の音色が途絶えていた時期もあります。今回は、このちゃらぼこ大鼓の復活に尽力された遠藤さんにお話を伺いました。

遠藤さんが大宮地区の大組組長を務めていたときのことです。その地区には、昔お祭りでちゃらぼこ太鼓を叩いた85歳になるおじいさんがいて「自分がいなくなったら、ちゃらぼこを教える人がいなくなってしまう！」と危機感を持っていました。こういった古くからある伝統行事の継承問題は日本の各地で起こっています。特に大宮神社のお祭りでは、ちゃらぼこが20年間途絶えていたことに加え、ちゃらぼこ奏者が大人から子供へと移行した時期があったため、演奏できる世代がごっそりといなくなっていたのです。ちょうど遠藤さんがその世代に属し、ちゃらぼこの音色を聞いてはいたけれど演奏する経験はありませんでした。

そんな遠藤さんに相談が持ちかけられたので当初は困惑したそうです。しかし、組長として責任と義務を果たすために引き受けることに。そして試行錯誤が始まります。一番の問題は、演奏をするための譜面は残っていても遠藤さん自身がちゃらぼこの演奏ができないことです。率先して取り組もうとしても、伝統を若い人に継承させることができません。そこで、相談を持ちかけてきたおじいさんを先生にして、手探りの中ちゃらぼこ復活のために自らも撥を持ち練習をしました。

蒲郡に伝わっているちゃらぼこの曲目は「板、富士、大、小、社切」の５つ。このうち「富士」は演奏されることが少なく、奉納の時に演奏されるという「社切」は大宮神社には存在しなかったそうです。先生役のおじいさんは「板」の演奏はできましたが、他の曲について記憶が定かではありません。そこで、蒲郡の他の地区で演奏できる人に教えを仰ぎ、演奏できる曲を増やしていきました。

伝統の継承という観点から子どもを含めた広い世代を巻き込む必要もありました。地区によっては同じように後継者問題を抱えているところもありますが、幸いにも大宮地区には子どもがたくさんいたので１学年 10 人程度の参加がありました。また、後継者の育成にも余念がありません。継続的に伝統を継承する仕組みを作るには、自分がずっと中心的な役割を担うのではなく、指導者を若い世代にバトンタッチして行くことも必要です。

ちゃらぼこが復活したことにより、大宮神社の祭りは華やかになりました。色々と苦労はありましたが、周囲からは「祭りが立派になったね！」と言われたことがとてもうれしかったそうです。今後はリズムが複雑で一番難しいとされる「社切」に挑戦するそうです。遠藤さんのちょっとはにかんでほほえむ瞳には、大宮地区のちゃらぼこの未来がくっきりと映っていました。